石井睦美論

石井睦美・少女を装飾する物語

野澤朋子

その時々の感情にとらわれ、悩みながら生きている少女（少年）像を、多様なイメージの中に置き描いてみる。素敵なもの、好きな詩、音楽、誰かの物語、人物、風景、なんでも自在に素材として取り入れ展開する。石井睦美の作品は、そうしたイメージのバリエーションである。

石井は八〇年代、『びわの実学校』『飛ぶ教室』『毎日新聞はないちもんめ「小さな童話大賞」』に作品を投稿し、出発した。幼年童話、絵本、おとなの小説まで広く手がける。子どもの文学とおとなの文学をつなぐ＝境界をなくす流れが進む中の象徴的な作家だ。

文学は、人間とはなにかをとらえるものだ。生きる手掛かりだ。子どもを対象とする児童文学も同じだが、さらに、子どもとはなにかをとらえる、二重の試練が課されている。なぜ子どもに、何を、どう伝えるのか。境界とは、その意志のことだ。意志を失えば、世俗で流通するおとなの理屈と子ども像を、子どもに輸出するものになりかねない。その問題意識から、石井の作品の検討を行いたいと思う。

●子どもの肯定の仕方

石井が書く家族には、愛と支配を取り違える親の姿があり、自立を望みながら依存する子どもの姿がある。無償の愛を求めながら得られない、子どものいらだちとさみしさが、繰り返し出てくる。心に引っかかってきた子ども時代の体験を、石井は作品に織り込む。

「両親、母はとくにわたしの幸福を願ってやまなかったので、いつのまにかわたしは、母のために幸福になりたいと感じるようになっていったのです。母の望む幸福とわたしが欲しかったそれとが食い違うときは、母の気持ちを優先しようとしました。母が大好きだったから。確かにわたしはアダルトチルドレンでした。思えばずっと軽い抑鬱状態のなかで生きてきたようなものです。母が強いたのではありません。愛に応えようとして、わたしは間違ってしまったのでしょう」（『再会と別離』新潮社　二〇一一）。母の愛が、子どもを支配し、主体を奪う。このような子どもを、石井は作品の中に置き、おとなへの皮肉な眼差しや言葉を与え